

平成 17 年度血液凝固異常症全国調査報告書 — 概要 —

血液凝固異常症全国調査運営委員会

平成17年度の血液凝固異常症全国調査は1,384施設(1,499担当部所)に調査用紙を送付し、平成17年5月31日時点における状況を報告して頂くよう依頼した。調査の対象期間は平成16年6月1日から平成17年5月31日までの1年間である。

新規に報告された症例の追加と、対象期間の死亡報告による減少を総合すると、平成17年5月31日現在で集計した日本全国に生存する血液凝固異常症の総数は、下表に示すように6127人(HIV非感染例5286、HIV感染例841)となった。

日本全国における血液凝固異常症総数

	血友病A	血友病B	VWD	類縁疾患	小計
HIV非感染生存	3415	697	798	376	5286
(男性)	3391	691	360	209	4651
(女性)	24	6	438	167	635
HIV感染生存	636	194	7	4	841
(男性)	636	194	2	1	833
(女性)	0	0	5	3	8
HIV非感染・感染生存合計	4051	891	805	380	6127
(男性)	4027	885	362	210	5484
(女性)	24	6	443	170	643
HIV感染死亡(累積)	450	131	1	8	590
(男性)	448	129	1	6	584
(女性)	2	2	0	2	6
HIV感染総数(生存および累積死亡)	1086	325	8	12	1431
(男性)	1084	323	3	7	1417
(女性)	2	2	5	5	14

対象期間におけるHIV非感染の死亡報告は16例、HIV感染の死亡報告は11例であった。HIV感染例では昨年度までに引き続き、HCVの感染が原因と考えられる重篤な肝疾患の報告が増加していた。

生存中のHIV感染例におけるインターフェロン治療経験がある割合は、これまでの累積で8%であり、未だ治療が広く普及したとは言い難い。HCV感染に対する治療がより積極的に行われ、この割合が上昇していくことが必要であろう。

その一方で、インターフェロンの治療により肝炎の症状が治癒したという症例も、これまでの累積で118例(HIV非感染例83、HIV感染例35)が報告されていた。今後、とくにPeg-インターフェロンとリバビリンを用いた治療が普及することにより、治癒症例が増加することを期待したい。

対象期間内に行われた治療における成績をHIV感染の有無によらずに総合すると、従来型のインターフェロンとリバビリンの併用療法において、ウイルスが消失し、かつ肝機能の正常化が認められた割合は57%、Peg-インターフェロンとリバビリンの併用療法においては50%であった。

HIV感染例においては、新たなエイズ指標疾患の発症は合計4例で、この内1例は対象期間内の死亡例であった。死亡時にエイズ指標疾患を有する例は、この1例のみであった。さらに、CD4陽性細胞数の平均値は444/ μ L、HIVのRNAコピー数は測定感度未満が約60%と、HIVに関しては比較的良好な状態が保たれている。しかし、リポジストロフィーを発症している割合については、この4年間で明らかに上昇している傾向が確認され、また、乳酸アシドーシスが認められる割合が2.5%に達している。このように、HCVによる肝疾患のみならず、抗HIV薬の長期服薬によってもたらされる代謝異常についても、注意と対策が必要な状況となってきた。この点に関しても、慎重な調査を継続していく必要がある。